

多文化共生社会の実現に向けた国際交流活動
 —SDGsや日墨両国について学び、学んだことを伝え合ったり、
 多言語で関わったりして、両国の良さや課題の理解を深め、将来につなげる—

前日本メキシコ学院 日本コース 教諭
 岐阜県岐阜市立常磐小学校 教諭 森 哲也

キーワード 多文化共生、国際理解、国際交流活動、SDGs、多言語

赴任校の概要（2024年8月20日現在）

学校名・日本語：日本メキシコ学院 日本コース

学校名・現地表記：Liceo Mexicano Japonés A.C.

URL：<https://www.liceomexicanojapones.edu.mx/ja>

1 はじめに

(1) 願う子どもの姿と子どもの実態から

私は日本メキシコ学院日本コース（以下本校）に勤務する中で、日本コースとメキシココース（現地校）が同じ敷地内で一緒に生活したり、交流学习などをしたりすることに非常に感銘を受けた。世界でも珍しい国際校である。赴任1年目はオンラインでしか交流ができなかったが、画面越しに目を輝かせて交流する児童の姿があり大変感動した。

また、毎年担任する学級内において、メキシコにルーツをもつ児童生徒が数名いた。それぞれの文化をもつ児童生徒が積極的に学びを伝え合ったり、多言語でかかわったりすることは、この学校だからこその貴重な経験であり、これからの多文化共生社会につながっていくのではないかと考え、研究・実践を進めた。

2 願う子どもにせまるために

(1) 研究仮説

両コースが共に生活する日本メキシコ学院において、児童生徒にメキシココースとの意図的な交流活動を設けたり、教師自身がメキシココースの先生と積極的にかかわったりするとともに、メキシコの魅力を語る場を設けることで、児童生徒がお互いの文化や人のよさを理解し、共に手を取り合って生活や学習に取り組むことができる。

(2) 研究内容

児童生徒が互いの国や人のよさを理解し、積極的にかかわりをもつ国際交流活動の在り方

(3) 研究方法

- ① 積極的なかかわりを生み出す言語にとらわれない交流活動
- ② 児童生徒の手本となる教師のメキシココースとのかかわり
- ③ SDGsをテーマにした意図的・計画的な交流
- ④ メキシコの魅力を語る場の設定

以上の4点について、活動への取り組みの様子や振り返り・満足度などから明らかにする。

3 具体的な実践方途・実践例

①積極的なかかわりを生み出す言語にとらわれない交流活動

特にメキシコに来て日の浅い駐在家庭の子どもたちにとって、話をしたり、聞いたりするのみの交流活動は、不安が大きいと考える。そこで、ダンスなど、言葉にとらわれずに活動を行うことで、言葉のみよりも安心して積極的にかかわることができると考えた。

実践例：

中3 総合的な学習の時間「両国のダンスを通して文化や共存・共生を考えよう」(令和5年5～7月実施)

1回目の交流でメキシココースの中3生徒からメキシコのダンスを学んだ。そして、2、3回目は日本コースの生徒がメキシココース中3、中2生徒の順にツバメダンスを教えた。自己紹介やダンスでの教え合いを言語にとらわれずに、スペイン語や英語、日本語の3言語のどれを用いてもよいことや、身ぶり手ぶりをを用いることなどを伝え、積極的にコミュニケーションをとることができるようにした。また、ツバメダンスの共存・共生の説明をすることで、この学院で共に学び、共に生活することをダンスを通して考えることができるようにした。

授業の様子では、グループごとの自己紹介では、メキシココースの生徒がスペイン語だけでなく、日本語や英語も使うことで、日本コースの生徒もスペイン語だけでなく、英語、日本語の3言語でかかわることができていた。また、交流学習後の振り返りでは、次のような記述があった。

- メキシココースの生徒と英語で話しながらダンスと一緒に踊れて楽しかったです。メキシココースの生徒は、とてもダンスがうまくてすごかったです。また一緒にやっていきたいです。
- 言葉を使わなくても動きやジェスチャー、効果音でコミュニケーションをとることができました。言葉が通じない相手でも話すことはできるのだと思い、自分の自信になりました。これからもどんどん交流していきたいです。

授業の様子や生徒の振り返りから、自分のことを伝えたい、仲間のことを分かろうとしたいという思いが、一つの言語にこだわらずより伝え合いやすい言語を選択することにつながったと考えられる。

②児童生徒の手本となる教師のメキシココースとのかかわり

日本の体育的行事である運動会がここメキシコで日本コースとメキシココースが手を取り合って行われ続けている。日本メキシコ学院の開校以来、令和5年度で47回ある。これは、同じ敷地内で生活する本校だからこそ実現している素晴らしいことである。児童生徒がガリセオ大運動会という行事を一生懸命行ったり、両コースの交流を通して仲を深めたりすることができたらどんなに素晴らしいことかと常々考えている。

その中で、令和4年度に赴任後初めて、コロナ禍明け3年ぶりに行われた大運動会の取り組みでは児童生徒同士が種目内容や並び方、移動の仕方などを理解していないと練習がスムーズに進まないことが分かった。これは、言葉の壁があることも大きな理由であるが、教師も積極的にかかわる姿勢が大切だと考えた。

そこで令和5年度に積極的にメキシココース教員にかかわり、打合せを設けたり、練習中にメキシココース教員に話したり、児童生徒にスペイン語で話したりすることで、練習もスムーズにいくとともに、それを見る児童生徒が互いにより積極的にかかわることができるのではないかと考えた。

実践例：

大運動会の取り組み「メキシココースの生徒にラジオ体操を教える。」(令和5年10月に実施)

大運動会では、準備体操としてラジオ体操を行っている。3年ぶりに行われた令和4年度には、私はメキシココ

ースの体育教員や代表生徒にラジオ体操を教えた。昨年度の様子を見て、メキシココース中学部の教員は、「さらに中学部の生徒がラジオ体操を上手にできるようにしたい」と考えたようである。私は、ラジオ体操や体操の隊形を生徒に教えてほしいと頼まれて快く引き受けた。



メキシココース中学部にラジオ体操を教える

その場で私は、通訳の方も交えながらメキシココース中学部の教員と積極的にやりとりし、生徒への声かけは積極的にスペイン語を使った。メキシココースの生徒は、ラジオ体操を覚えようと一生懸命行っていた。その姿に、「Lo hicieron muy bien. (ロ イシエロ ムイ ビエン) ※よくできました」などの言葉をかけると、とても喜んで歓声が上がった。一緒にラジオ体操を行った日本コースの生徒もうれしそうだった。また、大運動会後の中3生徒の振り返りで仲間の頑張りやよさを記述する項目を設けたが、そこに次のように書かれていた。

もりもりむんむん 練習も本番も本当に全部おこなった！スペイン言語も上手かった！

木 新也 先生(大運動会の準備をすくかば、ていて、スペイン語でも言葉も覚えたりして、すごかったです！)

大運動会の振り返りでの仲間のよさの記述(永住家庭の生徒2人)

この2人は永住家庭の生徒である。そして、「仲間のよさを書きましょう」というところに、わざわざ教師のことを書いてくれた。私は、大運動会のために大運動会で使うことができそうなスペイン語を一生懸命メモして、覚えて、積極的に使おうとチャレンジしていた。そのことを、家庭ではスペイン語も使っている生徒が見て、頑張っていると感じてくれたことをうれしく思っている。

私は練習当日を通じて、勝敗に関わらず、みなが1つのことに向けて協力できる運動会のすばしさを改めて感じる事ができました。リレーの練習では、お互いにこうしていいよとアドバイスを送りあったり、大玉ではシミュレーションも作りました。その中で練習でも本番でもいかに自分の役割に頑張ろうと、うなずいて話を聞いたり、日本コースもメキシココースも関係ないんだなと思ったり。また、大玉の初めての練習で、メキシココースのことが当たり前のようにみんな話しかけてきてくれました。私もできるだけ自分から話かけるように意識し、「頑張ろうね」と言葉ではなくても、声かけで伝えることができました。私はこの運動会で、お互いに仲を深められたと思います。今までは、一方的になってしまっていたが、自分から積極的にコミュニケーションを取ることができたと思います。これからの生活で、正論や言葉に頼らなく、仲良くせよ自分が今やめたことを大切に、交流を深められたらいいなと思います。

大運動会の振り返りでの記述(駐在家庭の生徒)

また、大運動会の練習から当日までの生徒の姿では、メキシココースと日本コースの人数は9:1ぐらいの割合ということもあり、初めはかかわることに消極的だった生徒が多かったが、徐々にかかわりが多く見られるようになった。私が担任する中3生徒の1人は右のように振り返りを書いていて、この生徒は駐在家庭の生徒である。

この生徒は、言葉で伝わらなくてもジェスチャーを用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとしていることが分かる。そして交流に対しての前向きな姿勢が伺える。

大運動会での取り組みを通して、私を含めた日本コース教員のメキシココース教員や生徒への積極的なかかわりや言動が、生徒にも伝わり、両コースの生徒の積極的なかかわりにつながったと考えられる。

③SDGsをテーマにした意図的・計画的な交流

今年度日本コース中学部は、年間を通して総合的な学習の時間にSDGsについて学習してきた。6月には、明治大学の学生の方からオンラインでSDGsを学び、その後個人で調べたい目標を決めて調べ学習を行った。それらをもとに、9月の学習発表会では、個人の調べ学習をもとに学年で発表内容を決めて劇やプレゼンで発表した。こ

これらの学習のまとめとして、11月に中学部1、2年生に各自が調べ考えたことを発表・交流会を行った。その後、メキシココースの生徒にも発表・交流会を行った。

実践例：

中3 総合的な学習の時間「SDGsについて調べたり考えたりしたことを伝え、交流しよう。」(令和5年11月実施)

日本コース中学部1・2年生に発表したスライドをもとに、メキシココースに伝わるようにスライドを修正した。必ずスペイン語に直すというわけではなく、伝えるための工夫を一人ひとりが行うことで、個に応じた言葉の力を付けていけるようにした。また、日本コースの生徒が発表した後に、メキシココースの生徒から感想や考えを聞いた。発表したSDGsの目標について考えを交流したりする活動を設けて、一人ひとりがよりかかわれるようにした。授業では、作成した原稿のスペイン語を読んだり、絵を指しながら身ぶり手ぶりをういたりするなど、なんとか相手に伝えようと発表することができた。また、日本語を頑張って話すメキシココースの生徒もあり、その場合は日本語でやりとりしたり、言葉が理解できない時に日本コースのスペイン語が得意な仲間に話してもらったりするなど、仲間と協力しながら交流を進めることができた。交流学習後の振り返りでは、次のような記述があった。



メキシココース生徒に絵やスペイン語を用いてSDGsの発表を分かりやすく行う

- 作ったスライドや発表をしっかりと理解してもらえてうれしかったです。また、私の意見にみんなが賛同してくれて世界でジェンダー平等の考えが広がっているんだと思いました。また、ディベートもとても盛り上がって有意義な時間を過ごすことができたと思いました。
- 感想交流の時に、フェアトレードは経済が発展している国でないとできないという意見を聞いて、確かにそうだと思います。いろいろな意見を聞くことができてよかったです。

授業の様子や生徒の振り返りから、SDGsの発表や交流を通して、他国の生徒の考えを知ることができて生徒の学びになったと考えられる。それだけでなく、SDGsが世界共通の目標であるので、交流というよりも議論にまで発展することができ、SDGsという目標は考える土台として適切であったと考えられる。

④メキシコの魅力を語る場の設定

今年度の本校の研究主題『自信をもってメキシコを語れる人材の育成』一多言語環境を活かしたグローバル人材の育成を目指して一にもかわり、インプットするだけでなく、アウトプットすることが必要だと考えた。そうすることで、自分が感じたメキシコのよさについて考えを整理することにもつながると考えた。

実践例：

中3 朝の会「メキシコの魅力の1分間スピーチ」(令和5年7月～10月実施)

私が令和5年度に担任した中学部3年生の朝の会で1分間スピーチを設けた。日直である1人が1分間語るというもの。当初はテーマを設けず日常を自由に語るようにしており、生徒は楽しく取り組めた。7月から「メキシコの魅力」を語ることになった時には、テーマが制限されたことに生徒はあまり乗り気ではなかった。

しかし、私が「メキシコの地で暮らす貴重な経験」「日本とメキシコの懸け橋」「メキシココースと共に学ぶりセオだからできる交流」など、それを語るよさを生徒に伝えることで理解することができた。

スピーチを始めた当初は、観光地や食べ物などの日本との違いを語る生徒が多かった。それが毎日一人ひとりのスピーチを聞くことで、人とのかわりなどを語る生徒も増えてきた。多文化共生や国際理解、国際交流の観点にも意識が向いてきたように考える。

そして、日本の高校の帰国生対象受験をする生徒が数名おり、面接の対策として「メキシコの魅力」や「メキシコの説明」を語る準備をする生徒がいた。次は、ある生徒が準備していた文章である。

よいところ：人が陽気で親切

具体例：誰にでもフレンドリーで優しい。初対面の人でも積極的に交流できる。例えば運動会の練習中に日本人が自分だけになったときも周りのみんなが簡単なスペイン語でなんとか私を助けようとしてくれる。自分も初対面の人との距離の縮め方や人に積極的に手を差し伸べることができるようになった。

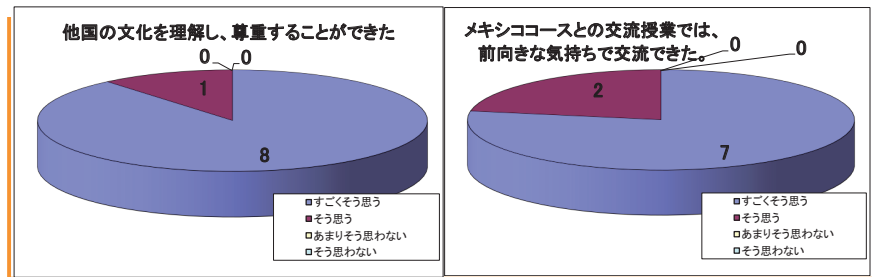
海外で現地の人と深く知り合うには現地の人と同じことをして喜びを分かち合うことが大切だということを学んだ。

この生徒は、自分が体験したことをもとにメキシコの魅力を準備して語ろうとしていた。また、その経験から学んだことも自分なりに整理していた。さらに、治安や貧富の差についても日本と比べて考えており、「良くないなあ」「変わってほしいなあ」と感じることもまた、将来世界を変えていくきっかけになると考える。学級でメキシコの魅力を語る場を設定したことは、生徒がメキシコについて自分の考えを整理すること、メキシコの魅力や課題を再確認できることにおいて、有効だったといえる。

4 成果と課題

(1) 子どもの意識調査から

令和5年度からの校内研究ともかわり、12月のみのアンケート実施となったが、本実践後の異文化理解・尊重や交流授業を前向きに取り組むという質問項目に中3生徒全員が肯定的に答えている。そのうち、どちらも8割程度の生徒が「すごくそう思う」と答えた。



令和5年12月7日(木)実施の学校評価アンケート結果 対象：中学部第3学年 9名

(2) 総括 [○成果 ●課題 →課題に対する具体的方途]

<研究方法①>

- 言語にとらわれないダンスのような交流活動は、児童生徒の積極的なかわりを生み出すことができた。
- 駐在家庭の児童生徒にも自信をもって話すことができるようにする「ことばの育成」に弱さがあった。
- 交流授業だけでなく、メキシココースの生徒とのかかわりを増やすとともに、普段の日本コースの授業でも自信をもって言語を使う場を設け、認め、価値付けていくとよい。

<研究方法②>

- 教師のメキシココースとの積極的なかわりやスペイン語のチャレンジで、児童生徒の積極的なかわりを生み出すことができた。

<研究方法③>

- SDGsをテーマに意図的・計画的に交流を行ったことで、整理した考えを自分なりの伝え方を工夫することができた。また、SDGsという世界共通の目標が両コースの考える土台として適切であった。
- メキシココースの発表を聞く場がなかったことで、聞く力を付けるには弱さがあった。
- メキシココースの発表を聞く場を設け、さらに聞く力・ことばの力の育成を図っていくとよい。

<研究方法④>

- 学級でメキシコの魅力を語る場を設定したことで、生徒がメキシコについて自分の考えを整理し、メキシコの魅力を再確認することができた。
- 学校全体の児童生徒において、「メキシコの魅力」を語るという力には弱さがある。
- 学年を越えて「メキシコの魅力」を語る場を学校全体にも広げていくとよい。

5 終わりに

日本人学校とメキシコの現地校が同じ敷地内で共に生活し、学習する児童生徒の学びから、多文化共生や国際理解が私自身も深まった。そして、その準備や運営のための、私とメキシココースの教員とのかかわりも大きな学びとなった。私が3年間多くの職員の皆さん、児童生徒、保護者に支えられながら勤め上げることができたように、目の前の子どもたちも異国の地で不安を抱えたり、言葉の難しさにつまずいたりする中で、様々な人と関わり支え合いながら成長しているのだと思う。だからこそ、多文化共生はとても大切なのだと実感している。

しかし、多文化共生や国際理解という点で、もっと多くの児童生徒を積極的にすることができたのではないかと反省する。また、本校が掲げる「日本とメキシコの懸け橋」につなげるために、まだできることがあったのではないかと考える。日本メキシコ学院というすばらしい環境で学んだ多文化共生や国際理解を、今後は岐阜県の児童生徒に大いに伝え、見方や考え方を広げたり、深めたりできるよう、精一杯取り組んでいきたい。

<参考文献等>

- ビバ・メヒコ21 (平成29年4月:日本メキシコ学院日本コース)
- SDGs入門～日本とメキシコから共に考える～ (令和5年3月:明治大学商学部所康弘演習室)
- 小学校学習指導要領解説(総合的な学習の時間編) …平成29年7月(文部科学省)
- 中学校学習指導要領解説(総合的な学習の時間編) …平成29年7月(文部科学省)
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 総合的な学習の時間】…令和2年3月(国立教育政策研究所教育課程研究センター)
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 総合的な学習の時間】…令和2年7月(国立教育政策研究所教育課程研究センター)